

巻頭特集

クラフトにひたる 工芸の五月



大島健一さん

古藤未来さん

伊藤博敏さん

春はあけぼの、五月は工芸。松本ではそれがスタンダードなのかもしれません。33年前から続いているクラフトフェアを軸に、街中の各所にギャラリーが開かれたり、まち歩きイベントが行われたり。長い冬が去って新緑が目に見える五月は、街に出かけて工芸のぬくもりを感じるのにぴったりの季節です。今回は「工芸の五月」実行委員会の皆さんに、これまでの歩みや思いなどを聞きました。

軸となるのはクラフトフェア

「若手作家の登竜門」に定着

1カ月にわたって各地で行われる多彩なイベントのうち、核となるのはクラフトフェア。つくば万博と同じ1985年に始まりました。「日本中がこれからはコンピュータの時代だ！」という風潮になっていたときに、「手作りだ！」と言って始めたんです。当初から関わっている工芸の五月実行委員長の伊藤博敏さんは冗談交じりにそう振り返ります。国内では第1号の草分け的存在で、第1回は45組65人が出展。年々規模が拡大して若手作家の「登竜門」として定着し、今回は300弱の枠に対して1200組もの応募が殺到しました。

来場者はピーク時の2012年で約70,000人になり、昨年は48,000人が訪れました。「松本に選ばれたら一人前...という雰囲気になっているのはありがたいけど、正直、やるべきことをやるので精いっぱいです」と苦笑するのは、クラフトフェアを取り仕切る大島健一さん。「まちおこし的な『下心』はなくて、自分たちが純粹に楽しめるようにやってきました。(出展者や来場者の数が)多ければ多いほどいい、という価値観はありません」と、思いを話してくれました。

「工芸のまち」松本を満喫

催し盛りだくさんの1カ月

この盛り上がりを生かすべく企画されたのが、「工芸の五月」です。「クラフトフェアに集まる人に市内を回遊してもらい、松本を『工芸のまち』として認識してもらえようなことができないか?という考えでした」と伊藤さん。2007年、市政100周年の提案イベントとしてスタート。手探り状態の中で始まった取り組みも、賛同者が増えてすっかり規模が大きくなりました。

好評を博している催しの一つが「ほろ酔い工芸」。松本平を中心とした酒蔵やワイナリーとのコラボレーション企画で、今年はワインがテーマです。作家がこの企画のために制作した器と県産ワイン1杯、おつまみ盛り合わせ付で3000円の参加料。このほか、市内に流れる豊かな湧水もキーワードに。各所に点在する井戸をめぐる「みずみずしい日常」という企画からスタートし、今年も松本市内の民家「池上邸」を会場にしたアートプロジェクト「池上噴水社」が開かれます。

街中ギャラリーも多彩に 信州松本の魅力を再発見

関連イベントの一つ「商店と工芸」を企画している有志も訪ねました。「工芸の五月」の一部として参加するようになって6年目で、村山謙介さんは「クラフトフェアでせっかく人がたくさん来るので、街に楽しく滞在してもらって松本のいいものをアピールできれば...と思って始めました」。自身が経営する村山人形店もギャラリーに一変し、木工芸作家が趣向を凝らした作品が並びます。

いずれにしても、多彩なイベントに共通しているのは、「松本の資源や宝を再発見する、ディスプレイ・マツモト」(伊藤さん)という思いです。クラフトフェアは県内外から作家が集まるのに対し、「工芸の五月」の企画では地元の作り手もクローズアップ。事務局スタッフの古藤未来さんは「工芸の五月」では様々な切り口で気軽に工芸を楽しめる企画を揃えています。街を散策しながら、地元の作り手や職人さんの技にもぜひ接していただければ」と話してくれました。

まち歩きにちょうどいい陽気の五月。松本の工芸を満喫できれば、人生はより豊かに彩られるのではないのでしょうか。